農作業 テクニカル ダイアリー

Agricultural-work technical diary

トウモロコシ

グリーンプラザ
営農指導員　古谷 公一

適期収穫が大切

「ゴールドラッシュ」の適期収穫は、トンネル栽培では絹糸抽出日から23～25日、マルチ栽培では20～22日が目安です（積算温度は450～460℃が目安）。絹糸抽出日とは圃場全体の50％以上トウモロコシに絹糸が現れた日です。記録しておくとよいでしょう。

取り遅れによるしなびは、正品率を低下させる原因の一つです。早めに試し取りをして成熟度を確認しましょう。また、気温が高くなるとしなびが入りやすくなるので注意が必要です。播種日が遅い作付けほど、しなびのリスクは高くなります。

病害虫防除の徹底

紋枯病は降雨の後の高温、すす紋病は低温時の降雨条件下で発病のリスクが高まります。台風や大風での倒伏被害により病原菌の侵入が著しくなるので、倒伏株は無理に起こさず自然回復を待つとともに、降雨後の薬剤散布で予防的に防除を行いましょう。

●紋枯病（写真❶）

水はけの悪い圃場で発生します。発生してからでは完治が難しいので、リゾレックス水和剤を予防散布するとともに、排水対策および追肥による樹勢の維持に取り組みましょう。

●すす紋病

前年の被害葉で伝染源が越冬するため、発病のあった圃場ではできるだけ作付けを控えましょう。防除はトリフミン水和剤を散布します。

●アブラムシ

播種時から生育初期に注意が必要です。イヌムギなどのイネ科雑草から飛来し、5～6月に増加します。吸汁により株が弱り、多発すると黒いカビが発生するため株や実が汚れます。発生初期にはアグロスリン乳剤やアドマイヤーフロアブル、収穫期にはモスピラン顆粒水溶剤を散布します。

●アワヨトウ

雄穂出穂前までの注意が必要です。雄花が伸びるまでの若い時期に幼虫が葉を食害します。トレボン乳剤、アグロスリン乳剤が効果的です。

●アワノメイガ（写真❷）

雄穂出穂期からの防除が大切です。成虫が出穂後に若い穂に産卵し、幼虫が穂の内部に入り込み食害します。防除のポイントは、①雄花開花初期、②雄花開花最盛期、③絹糸抽出最盛期に合わせた適期防除です。①では、浸透移行性のあるパダン粒剤4を散布します。②では、プレバソンフロアブル5を散布します。③では収穫前日数を考慮して薬剤を散布します。

●オオタバコガ

幼虫が茎や雌穂の中に潜り込み、内部を食害します。成虫は雄穂に誘引されるので、受粉後に雄穂を切除することで低減させることができます。また、倒伏の軽減にもつながります。乾燥が続くと発生が拡大するので注意が必要です。収穫までの日数が少ないときはアファーム乳剤（収穫3日前まで）などを使用します。

獣害対策

近年、ハクビシンやアライグマなどによる獣害が多発しています。廃果実、家庭ごみなどは農地に放置せず、埋却処分をしましょう。また、電気柵の使用も効果的です。収穫直前の設置でも効果がありますので、活用することをおすすめします。

写真❶ 紋枯病の発病した株

写真❷ アワノメイガによる食害

落花生

販売開発部営農振興課
営農指導員　石井 枝里奈

栽培のポイント（表❶参照）

●畑の準備～播種

落花生は連作障害が出やすい作物なので、他の作物と輪作してください。基肥には落花生専用（5-15-20）を10アール当たり60キロ、苦土石灰を10アール当たり60～80キロ施用します。土壌診断を行い、石灰が不足していた場合は、土壌pHが6・0～6・5になるよう矯正してください。

準備ができたら、ベッドを作って2条用マルチ（孔径8センチ）を敷き、畝間130センチ、株間30センチで1～2粒ずつ播種します。鳥害対策として、キヒゲンR－2フロアブルでの種子消毒を播種前に行います。

●マルチ除去

収量・品質が低下しないよう、開花期（圃場の50％の株に1輪でも花が咲き始めた頃）後7～10日頃にマルチを除去し、雨水や灌水した水が浸透するようにします。

●中耕・培土（石灰施用）

開花初期から1～2回、中耕・培土を行います。子房柄が地中に侵入しやすくなり、収量を上げる効果があります。除草も兼ねて7月下旬までに行いましょう。また、石灰が不足していると空莢や未熟莢が増加するため、培土時に苦土石灰を10アール当たり40～60キロ施用してください。

●灌水

7月下旬～8月中旬（結莢～莢肥大期）に干ばつ害を受けると、子実の肥大が停止して空莢が発生し、収量が大きく低下します。畑が乾いているときは、1回当たり30～40ミリ灌水してください。

●試し掘り

収穫が遅れると、落ち莢が多くなったり、食味が低下したりするので、必ず試し掘りをして収穫適期を逃さないようにしましょう。ナカテユタカは開花期後80日、千葉半立は開花期後95日が収穫目安です。

●乾燥

掘り取り後は5～7日間地干しします。その後、風通しの良い場所で野積みし、ブルーシートや稲わら等で覆います。また、平積みにトンネルを掛ける方法もあります。十分に乾燥させた後、脱穀・調整してください。

病害虫対策

表❷を参考にして薬剤防除を行ってください。白絹病や茎腐病の被害株は早めに抜き取りましょう。

近年問題になっているヒョウタンゾウムシは、落花生のほかにもニンジン、ゴボウ、ネギ等を好むので、被害のある圃場ではこれらの作付を避けましょう。また、播種を6月上旬まで遅らせて、5月に圃場を空けることで、圃場で越冬している幼虫を餓死させるという対策もあります。

表❶　落花生の栽培暦

	5月	6月	7月	8月	9月	10月
	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下
千葉半立	○……	○――	――	――	――	――
ナカテユタカ	○……	○――	――	――	――	――
主な作業	基肥 播種		マルチ除去 中耕・培土		収穫	乾燥・調整

○・・・播種　▭・・・収穫、乾燥・調整

表❷　落花生に登録のある薬剤

薬剤名	対象病害虫	使用時期	倍率・使用量	回数
トップジンM水和剤	褐斑病、茎腐病	収穫7日前まで	1500倍	4回
フロンサイド粉剤	白絹病	収穫45日前まで	20kg/10a	1回
フォース粒剤	コガネムシ類幼虫	播種時	9kg/10a	1回
トクチオン細粒剤F	ヒョウタンゾウムシ類	収穫60日前まで	9kg/10a	2回

2月の分析経過について

残留農薬分析点数	多成分一斉分析	合計2点
		春キュウリ……1点
		ホウレンソウ……1点

※残留農薬分析において、基準値を上回る成分は検出されませんでした。

土壌診断点数……合計42点